

FIELD NOTE

no. 83 Dec.

都留文科大学 地域交流研究センター フィールド・ミュージアム部門 機関誌
【フィールド・ノート】 no. 83 Dec. 2014

特集

変化を見つめる —自然編—

新しい視点を添えて

フィールド・ミュージアムのたのしみ 第26回

自然の変化を記録する楽しみ

標本や記録から、変化を読み取る

ビオトープだより 秋 no.03

コットンボールができるまで

FIELD·NOTE

No.83 Dec. 2014 CONTENTS

04 特集 変化を見つめる —自然編—

06 新しい視点を添えて

08 フィールド・ミュージアムのたのしみ 第26回

・自然の変化を記録する楽しみ
・標本や記録から、変化を読み取る

12 ビオトープだより 秋 no.03

14 コットンボールができるまで

16 センサーカメラが写した動物たち

18 フィールド暦

20 特集まとめ

22 都留の道の風景

24 「道志手帖 No.6」

25 すぐそばにある暮らしを見つめるマガジン
「ヨコガオ face.01」



26 中嶋さんの畑から

28 私の鳥観察

30 連載第三回「ムジン」は今……
さんくみめ『八起飯店』のかたのお話

32 遊歩道を歩く理由

34 都留に残る織物産業

36 ムササビ観察日記

38 ネズミに会いに夜の森へ

40 あの人の尊敬する人第3回
若林英行さん

42 つるのあしもと

44 FIELD・NOTE NEWS

表紙写真：廣瀬はづ紀

ニホンリス。うら山にて撮影。
しばらく見ていると木の上でク
ルミを食べている様子も見ること
ができました。（2014.11.22）

『フィールド・ノート』では「都留の自然と人との交流」をテーマに、地域の自然・人・文化に関する
情報を記録し、発信しています。裏表紙のロゴの絵はアメリカのナチュラリスト、ヘンリー・D・ソロー
の著書『ウォールデン 森の生活』の初版本扉に、ソローの妹、ソフィアが描いたものです。ロゴにそえ
られている「Grow Wild」はソローの言葉で、その思想をわたしたちも大切にしたいとの想いを込めました。

特集 変化を見つめる —自然編—

(2014.12.02)



かつて、どこの田んぼにもいたタガメは、
姿を消してしまいました。

小さかったクルミの苗は、
いまでは大きく生長し、実をつけています。

年月をかけて大木にできた洞^{うら}は、
生きものの住処となりました。

わたしたちは変化をていねいに観察して、
記録を残してきました。

変化を観察して記録に残す。
そこにはどんな意味があるのでしょうか。





工事前のうら山の風景。山道の両わきには、太陽の光を遮るほどたくさんの木が生えていた（2014.05.10）

新しい視点を

添えて

入学以来、何度も歩いてきたうら山。そこで今年大きな変化が起こった。
このさき、うら山の生きものは、植物は、
どうなるのだろうか。

加藤萌香（初等教育学科2年） 文・写真
廣瀬はづ紀（社会学科3年） 写真

サークルで利用する機会も多く、頻繁に足を運んでいるうら山は、私の一番のフィールドだ。うぐいすホール手前がある入り口から奥に続く山道はたくさんの木々で覆われ、昼でも薄暗い。山に入ったことを知らせるようすつと冷たくなる空気。道のわきには濃い黄色の花をつけるヤマブキや見上げるほど大きなクリの木が生えている。春はヤマブキを使って遊び、秋はクリ拾いをした。朽ちた木が道を塞いでいて、アスレチックのように下をくぐって通る一本道。倒れた木を見てみる

と小さな洞^{うづ}ができていた。季節によって信じられないほど姿を変えるマムシグサに驚かされたり、ミズヒキに目が留まって秋の訪れを感じたり。うら山では季節ごとに生えてくる植物が出迎えてくれた。

その場所で今年の9月から砂防工事が始まった。うら山入り口のすぐ横にある谷の木が切り倒され、もともとあった斜面が削られた。更地となったところには重機が入り、今まであった山のかたちや景色とは驚くほど変わっている。

工事中の生きものたち

10月中旬ごろ、私は野ネズミの観察のために頻繁に夜のうら山に入っていた。

ある日、山道に入った途端頭上からがさつという音がした。立ち止まり、耳を澄ますと低くのを鳴らしたようなムササビの鳴き声が辺りに響く。木々を見上げ、ようすをうかがっていると、樹上を動き回っているのか木の枝が揺れる音がしてきた。ちょうど繁殖の時期だからだろうか、数匹の鳴き声が重なって聞こえる。こんな道路のそば、しかも目の前で工事がおこなわれているところにムササ



オバボタルの幼虫 (2014.10.18)



秋になって鮮やかに色を変えたマムシグサ (2014.12.06)
(撮影：南條新)

ビがいる。今まで入り口に來ていることも知らなかったが、工事中でも逃げずにいるということには驚きだ。

入り口付近から奥に向かって50mほどの両斜面には、オバボタルという陸生のホタルが生息している。木の葉の下などで暮らしており、ライトを消して歩くと、徐々に波紋を描くように広がっていく優しい光が現れる。光るのは幼虫で、成虫になると光らなくなるそうだ。

今年は工事によって山道のすぐ横まで木が切られ、昨年オバボタルが生息していた場所の半分ほどが削られた。今では谷側にあった森林はなくなつて、向こう岸が見えるようになっていた。この状態でもホタルはいるのだろうかと心配しながら歩いていると、草の陰で薄黄緑色の光を小さく放っていた。よく見ると工事で削られたはずの道のわきでも光っている。光が見えるところを慎重に探すと小さな幼虫がいた。身体は落ち着いた藍色をしていて、そつと持ち上げると手のなかにやわらかい光が広がった。もうホタルは見られないのだろうと思っていたから、ホタルの光がいつそう輝いて見えた。

この機会を新たな視点で

工事により、年月をかけてできた木や豊かな土壌がなくなり、生きものの住む環境は大きく変わっている。聞き慣れない重機音が響き、日を重ねるごとに山のようにすが変わっていく。野生の生きものからしたら、一体何が起こっているのか理解できない状況だ。しかしそんな状況でも、すぐそばでは今までと変わらず、ムササビやホタルが暮らしていた。そのようすを目の当たりにして、私が思っているよりもずつと彼らは強く、周りの出来事に対して柔軟に対応していると感じた。

このさき工事が完了したとき、うら山がどうなるのか想像もつかない。けれど自然だつて一方的になくなるわけではない。時間はかかったとしても、その場所に順応した植物が芽吹き、そして再び生きものがやってきて暮らしていくだろう。

私は、自然のなかで生きものが強く生きていく姿を垣間見たことで、今まで親しんだ景色を心に留めつつも、また新しくうら山が変わるひとつの出発地点として、今の状況を捉えたい。



工事によって木が伐採された山道。この場所の近くでムササビの鳴き声を聞いた (2014.12.03)

フィールド・ミュージアムのたのしみ



残雪のなかのニホンジカ（2010年4月7日）

H・D・ソローが『ウォールデン 森の生活』（今泉吉晴訳、小学館）で示唆した散歩のほんとうの意味とは何か。散歩をとおして見えてくるものとは。私たちは歩くことで、変貌する自然やまちの今を記録し、フィールド・ミュージアムのたのしみを報告していきます。

自然の変化を記録する楽しみ

北垣憲仁（本誌発行人）＝文・写真

都留文科大学のキャンパス周辺の森は、私が大学時代から親しんできたフィールドです。昔の人が森の作業などで使っていた道や、木材の切り出しで使っていた道があり、植林地や雑木林など植生の変化も豊かです。四季を通して変化を観察でき、一人で歩く時間が楽しみになっています。

昼間歩くことが多いため、野生動物に出会うことはほとんどありません。しかし、ところどころにある糞や食べ痕など生活の痕跡を見つけると、その動物がどのように食物を探し、食べたのかなど想像が膨らみ歩くことが楽しくなります。

毎日、大きな発見があるわけではありません。けれども、短い時間でも長年、同じ場所を観察したり歩いたりしていると、その場所の変化が実感をもって見えてきます。

ニホンジカに出会う

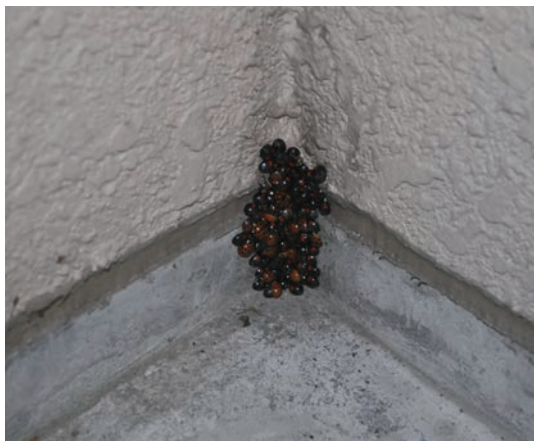
たとえば、ニホンジカが尾崎山で増え始めた、ということも自然の変化の一つです。はじめて私が尾崎山でニホンジカに遭遇したのは、2004年のこと。ちょうど都留文科大

学に附属図書館ができ、ビオトープが開設されたところです。尾崎山のすそ野に整備された遊歩道を歩いていると、突然、二頭のニホンジカが目の前を横切りました。そのうちの一头は、まだ体に斑点が残っていたことから子鹿だとわかりました。おそらく親子なのでしょう。二頭とも私のほうをじつと見て、しばらくフリーズをします。そして跳ねるようにして森のなかに姿を消しました。この尾崎山で鳴き声をはじめて記録したのは2005年です。それ以来、頻繁に鳴き声が聞かれるようになりました。

昔は尾崎山にニホンジカはいたのだろうか。長年、尾崎山で農業や林業に携わっていられた清水貞一さん（91）にお話をうかがうと、ニホンジカやカモシカなど大型獣は尾崎山ではまったく姿を見ることがなかったそうです。

低山で確認されたカモシカ

そのカモシカも、2013年にはじめて尾崎山で確認されました。ふだんは高山に住むカモシカがなぜ標高600メートルほどの低



自然科学棟で越冬するナミテンノウ（2013年2月10日）



中屋敷でも記録されたカモシカ（2011年5月10日）

山に現れるようになったのか。その原因はよくわかりません。私たちがフィールドとしている中屋敷でも、2011年にカモシカが赤外線センサーカメラに写っているのを確認しました。

越冬する個体数が減ったテンノウムシ

自然の様子が大きく変化しているのを実感できる例はほかにもあります。自然科学棟には、毎年、10月下旬から11月上旬にかけて多くのテンノウムシが越冬にやってきます。この建物は、テンノウムシの越冬場所として有名で、1985年ころには、数万匹のテンノウムシが越冬に来ていたという記録があります（新妻昭夫編『ナチュラリスト入門』、岩波書店）。

しかし、近年、越冬個体数は大幅に減少し、2013年の調査では、1000匹ほど。カモシカがどうして低山に現れるようになったのかという謎と同様、テンノウムシの越冬個体数が激減した理由ははつきりしません。これだけ減るということは、自然の動向に大きな変化が起きているということでしょう。

注意深く観察する目を育みたい

自然の世界の仕組みは複雑すぎて、たとえばニホンジカが尾崎山に増えた理由も、森林の変化なのか、温暖化のためなのか原因を突き止めるのは容易ではありません。しかし、こうして目に見える、また実感を伴って感じることでできる変化を、たとえ何気ないことであっても記録しておく、多くの人と共有できるよさがあります。このような観察の記録を長年にわたって積み重ねていけばその変化の原因を探る貴重な資料となるでしょう。

自然は日々、刻々と変化しています。わたしはその動向に疎いところがあり、森を歩いていても気づかないことが少なくありません。そのたびに、とうていわたし一人では見渡すことのできない魅力的な世界がまだまだ眼前に広がっていることを痛感します。

そうした奥深い自然の魅力を楽しむ、変化の原因を探り、どうすればよいかを考えるためにも、地域の多くの人と自然の観察記録をもち寄り、さまざまな変化や気づきを報告しあえる場をつくりたい、というのがわたしの夢の一つです。

標本や記録から、 変化を読み取る



いまも楽山公園で観察されるツマキチョウ（右）
とウスバシロチョウ

生きものの個体数や分布状況は、
その環境の特徴を表していることがあります。
変化の多少はあれど、自然はつねに揺れ動いているもの
です。

いまを記録していくことが、
その後の変化を読み取ることに繋がります。

西教生（本学非常勤講師）＝文・写真

私はある地域の長期的な生きものの変化、
つまり個体数の増減や分布域の変遷に関心が
あります。これらの変化が何に起因している
のかを知りたいですし、また、それを調べた
いとも考えています。

そこに生息している生きものの種類や個体
数は、その場所の環境をあらわすことがあり
ます。そのため、過去と現在の状況を比較す
ると、環境に変化があったのか、あるいはな
かったのかがわかるでしょう。さらに、変化
の度合いによる生きものの対応のありかた
は、その種の生態を反映していることがあり
ます。

しかし、過去の生きものの資料がいつも手
に入るとは限りません。少なくとも個人レベ
ルでは、あらゆる生きものの記録を残すこと
には限界があり、それが利用できる形として
残っていることは稀だからです。

たとえば、私たちの身の周りにいるスズメ
やツバメ。ごくふつうに見られる鳥ですが、
数年前から日本における両種の個体数が減少
していることが指摘されています。急激に個
体数が減少したり、増加したりする場合は記
録に残ることも多いと思いますが、緩やかな

変化にはなかなか目がいきません。スズメや
ツバメという身近な鳥の過去の記録でさえ、
思いのほか少ないのです。

ヒメシロチョウの標本

本学の自然科学棟の2階には、さまざまな
動物の標本が保存されています。2014年
の夏、標本箱に入っているチョウの標本を見
ているとき、ヒメシロチョウを見つけました。
ラベルには「1984年6月29日 楽山」と
記載されています（楽山は、本学の東側にあ



ヒメシロチョウの標本

る公園です)。ほかに、1980年代に採集されたヒメシロチョウの標本が複数ありました。このチョウは現在、山梨県のレッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類になっています。本種の有力な生息地のひとつである富士山北麓でも、個体数が著しく減少しているといえます。私はここ10年ほど、年間を通して楽山を含む本学の周辺で動植物を観察しています。が、ヒメシロチョウは一度も見ることがありません。

ツマキチョウやウスバシロチョウなど、いまも本学の周辺でふつうに見られるチョウの標本と一緒に保存されているヒメシロチョウは、30年前の本学周辺の環境を物語る貴重な資料です。ヒメシロチョウは草原や明るい草地に生息し、ツルフジバカマを食草として年3回発生するといえます。

30年前の本学周辺には、ヒメシロチョウが個体群を維持するために必要なものが揃っていたでしょう。この標本を通して、いくらか当時の環境を知ることができます。しかし、同じような環境に生息するほかのチョウは残っているのに、どうしてヒメシロチョウはいなくなってしまったのか。こうした疑問は、

環境の変化に対する種ごとの振る舞いに注目することの大切さを気づかせてくれます。

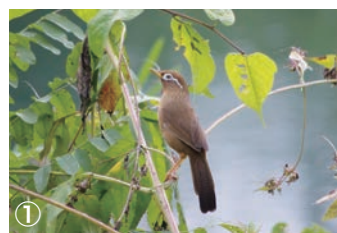
減った鳥、増えた鳥

カッコウやヒバリは、以前は都留市内に多く生息していたようです。ヒバリはまだ少し生息していますが、カッコウは繁殖期にはもう見られません。カッコウが市内のどこにいたのか、その記録が残っていないため、なぜ減ってしまったのかはわかりません。

減少した鳥がいるいっぽう、新たに定着した鳥もあります。外来種であるガビチョウが都留市内で見られるようになったのは1999年ごろで、同じく外来種であるソウシチョウが市内で繁殖期に確認されたのは2007年ごろからです。一般的に外来種の存在は、在来種に負の影響を与えると考えられています。ガビチョウとソウシチョウが定着したことによって、在来の生物相がどうなるのか。その変化をいち早く察知するために、注意深く観察していく必要があります。

イソヒヨドリも市内で観察例の増えている鳥です。本種は在来種で、自然に分布が広がっている点で、ガビチョウやソウシチョウとは

異なります。今後、イソヒヨドリが増え続けるのか、衰退していくのか興味もたれます。自然はつねに揺れ動いているものです。大きな変化を示すときもあれば、小さな変動を繰り返すというパターンを呈することもあります。過去に遡って、当時の様子を知る術は多くありません。だからこそ、身の周りの生きものの記録を着実に蓄積することが求められます。



- ①ガビチョウ。河川敷や放棄された畑などにできるヤブを好み、特徴的な大きな声でさえずります
②ソウシチョウ。ガビチョウよりもやや標高の高い場所で繁殖をします
③ヒバリ。ほぼ1年中、農耕地に生息しています

ビオトープだより 秋

no.03

本学附属図書館横のビオトープは、図書館の開設をきっかけに2003年につくられました。今では四季折々のさまざまな動植物を身近に親しめるこの場所。長い歴史のなかでどのように変わってきたのかをお伝えします。

10年の変化

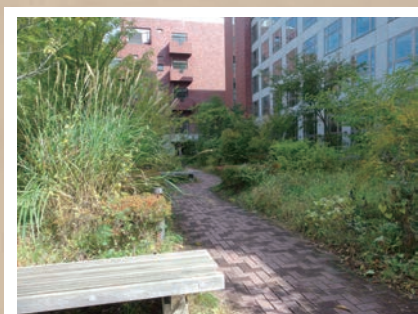
伊藤瑠依（社会学科2年）＝文・写真
羽野幸氏＝写真提供

2004年

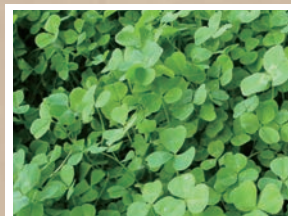


工場跡地であったこの場所。一番初めに一面に植えたのは繁殖力が強く成長が早いクローバーだったそう（2004.05.26）

2014年



現在は道沿いにツツジの垣根ができています。いまだに、少しではあるが当初植えたクローバーが残っている（2014.10.21）



クローバー（2004.05.21）



池のようす（2004.11.24）



看板づくり（2005.12.09）



はのさち
羽野幸さん（31）

在学中にビオトープ作業をおこなっていた。現在は宝地区で畑をつくっている（80号参照）

最初の年は、砂利が見えるほど草が生えていなくて、木も植えたばかりで殺風景でした。歩く人たちに、ビオトープの魅力を伝えようと手づくりの掲示板を作成していたのですが、生きものや植物が少なく、題材を探すのは苦勞の連続です。けれど、毎日のように通って観察するうちに、ビオトープが自分の庭のような存在になっていきました。毎年、少しずつ植物や生きものが増えていることが嬉しかったことを覚えています。

また、クルミは一年かけて苗から育てたものを植えました。私にとって、とても思い入れがある木です。卒業してからも気になって、都留に来るたびに訪れていました。

10年前を知るかた

最初の年は、砂利が見えるほど草が生えていなくて、

クルミの歴史



2004 年

羽野さんの思い出があるというクルミの木。十日市場に落ちていたクルミの実を育て、苗木にしたものをビオトープへと植樹した



2014 年

クルミの苗
約 30cm



女性
約 160cm



クルミの木
約 650cm

秋の植物メモ



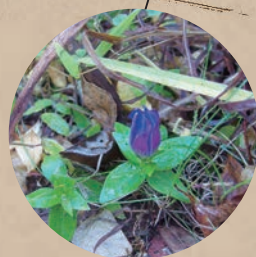
ホトトギス (2014.10.09)
花の斑点もようがホトトギスの胸の羽のもように似ていることから名づけられた。小さいけれど、鮮やかな紫色が特徴的で目を引く



ブッドレア (2014.11.09)
赤紫や白い花のものもある。見た目の美しさから庭木にされることも多いそう。チョウがよく集まる



キツリフネ (2014.10.09)
船が吊るされているようなようすからこの名がついた。実が熟すとちょっとした刺激ではじめて、タネを飛ばす



リンドウ (2014.10.30)
寒い地域で見られることが多い花で、本学周辺で見られることは少ないそう。ビオトープでもこの一輪だけが小道に生えていた



ガマ (2014.10.09)
ウイナーのような形をしたものがタネ。手で簡単にちぎることができ、なかにはふわふわとした毛が入っている



クルミの木

10 年前に植えたクローバーが残る場所

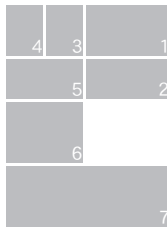


武田さんのお庭から コットンボールができるまで

ひょんなことから始まったワタの観察。
次から次へと姿を変えるワタの様子は私を夢中にさせた。
果たして、ワタはきれいなコットンボールになってくれるのだろうか。

今村遥香（社会学科 1 年）＝文・写真
武田明子氏＝写真提供





- [1、2]1の花がしぼむと翌日には2の色に変化する(2013.9.2)(提供)
 [3]緑色のワタの実(2013.9.2)(提供)
 [4]実は赤みがかかり、ふくらんでいる(2014.10.21)
 [5]4のときよりも実につや、ハリがなくなり、
 割れ目からは白い綿が見える(2014.10.28)
 [6]実は完全に割れて、1つから綿があふれている(2014.11.20)
 [7]きれいなまるいコットンボールができています。
 まるでわたあめのよう(2013.10.7)(提供)

10月14日の昼下がり、大学へ向かうためにアパートからのびるゆるやかな坂道を下っていると、近所のかたに声をかけられた。「これはワタの実だよ。綿になるの、知ってる？」声の主は武田明子^{ただあきこ}さん(67)。そう言われて、武田さんが指さす方向を見ると、ゴルフボールほどの大きさの実が目に入った。その実は緑色でところどころに赤紫色の斑点がある。さらに赤色のうねったガクが実を包みこんでいて、まるで「ドラゴンの卵」のようだ。「固いんだよ、触つてごらん」と武田さんに促され実を触つてみると、たしかに固い。表面はツルツルしていて繊維のような感じが少しもない。この出来事がきっかけでワタに興味をもった。調べてみると、どうやら実のなかに綿が詰まっていて、実の皮が破れるとコットンボールと呼ばれるやわらかな綿繊維があふれ出てくるらしい。私は自分の目でワタの実が変化の様子を見届けたいと思った。こうして武田さんのお庭のワタの実を観察する日々が始まった。

次の日から、武田さんのお宅の前を通るとき私の視線はワタの実にくぎ付けになった。観察を始めてから一週間すると、実全体に赤

みが増した。ワタの観察を続けるなかでふと夏にちょうどワタの植えてある鉢のところでクリーム色の大きな花が咲いていたことを思い出した。あとから図鑑を見て、それがワタの花だったことを知って驚いた。その花を見たのは夏休み前の7月だったので、夏休み中に花が落ち、この実ができたのだろう。ワタは次から次へと変化するおもしろい植物だ。

もつとワタについて知りたいと思って武田さんにお話をうかがうことにした。しかし、そう決意してから武田さんにお会いできない日が続く。そのあいだにもひとつの実が茶色つぼくなり割れて、割れ目からわずかに白いものが見えるようになっていた。焦る気持ちで見るワタの実は急に変化してしまいそうに感じて、気が気ではなかった。10月29日、ついに武田さんにお話をうかがうことができた。去年は10月7日に、まるく整ったコットンボールが見られたと写真を確認しながら教えていただいた。今年はワタの種をまくのが遅くなってしまったらしい。だから、コットンボールが見られるのはまだ先になりそうだ。すると、武田さんは「綿のなかには種があるんだよ」と玄関に飾ってあるリースから

綿をもぎ取って、私に渡してくれた。さいていくと、まわりにボワボワと白い毛が生えたヒマワリの種ほどの大きさの種が顔をのぞかせた。種は綿に守られるように包まれていて、簡単には姿を見せてくれなかった。

11月3日になると、実は完全に4つに割れて、白い綿がむき出しの状態になっていた。触つてみると、ぎゅつと凝縮していて固い。まだフワフワではなかった。少し残念に思ってたが、ついにまるく整ったコットンボールを見ることができると思つて、より注意深く観察するようになった。その2週間ほどあとに、4つに割れたうちの1つがやわらかくなり、滝のように垂れていた。数日間様子を見ていたがそれ以上変化はなく、今年のコットンボールはなんとも不恰好な形で完成されてしまった。

ワタの観察をしてみて、次々に変化していく姿に夢中になっていた。来年は種を発芽させることから始めて、ワタを自分で育てたいと思つている。今回は見ることができなかった、実が割れるところや花の色が変化する様子を見たい。来年こそはフワフワなコットンボールを見るぞ、と今から意気込んでいる。



センサーカメラが写した動物たち

本学フィールド・ミュージアムでは、キャンパス周辺のフィールドで赤外線カメラを利用した動物の調査をしています。ここでは8～10月のあいだに撮影された動物たちを紹介します。

本学フィールド・ミュージアム＝文・写真



ツキノワグマ 2014年8月6日

体が小さいため、昨年まで撮影されていた成獣とは異なる若い個体と思われます。木製のベンキ案内板が気になるようで、かじられたものを林内でよく見かけます。



ニホンカモシカ 2014年8月11日

センサーカメラを設置した2009年以後、2013年5月22日に初めてカメラに撮影されました。本年は直接観察もされました。



イノシシ 2014年8月20日

親子と思われる数頭で泥浴びをしようすが何度も撮影されました。鼻先で泥を掻き分け、泥浴びのための「ヌタ場」をつくる場面を初めて見ました。



アナグマ 2014年9月2日

夏まではタヌキの「溜め糞」として利用されていた場所が、こここのところアナグマの糞場となっています。写真はちょうど糞をしているところです。



ヤマドリ 2014年9月6日

山中で一度ヤマドリの尾羽を拾ったことがあります。長さ59cmもあるべっこう色の尾羽でした。同じく長い尾をもつサンコウチョウも本学のうら山で見ることができます。



カケス 2014年10月1日

カケスは木のうろや隙間、土のなかなどに木の実を貯える「貯食」をします。ヤマグリをくわえたカケスがこの後どのような行動をとったのか、想像をかきたてる一枚です。

カメラに写ったさまざまな変化



本学のキャンパスやその周辺には、いろいろな場所に常時5台ほどのセンサーカメラを設置して動物の調査をしています。この調査は2009年10月から継続していますが、2014年4月1日にうら山で初めて外来種のアライグマが撮影されました。アライグマは水辺を好む動物ですが、今回は山のなかで確認されました。

現在のところ、都留市内でのアライグマの生息状況はよくわかっていません。建物や農作物への被害も聞きませんので、広く定着しているわけではないようです。今後も調査を継続して、記録を集めていきたいと思います。なお、中屋敷フィールドでは2011年6月に本種が撮影されています。(西教生)



9月21日、センサーカメラに撮影されたテン。わずかなではありますが、尾の先が茶色っぽい夏毛から黄金色の冬毛へと生え変わってきているのが見てとれます。山中でいち早く黄葉するダンコウバイが葉を染め終えるのと、テンが全身に冬毛をまとうのとではどちらが早いのでしょうか。動物たちは季節を敏感に感じ取り、粛々と冬支度をはじめているようです。(西丸堯宏)



冬毛のテン



夏毛のテン

鮮やかに色づく秋。移りゆく季節のなかで、都留で見られた生きものたちをご紹介します。

『フィールド・ノート』編集部=文・写真

フィールド暦



ガマズミ

2014年10月18日

四日市場

真っ赤な実を枝いっぱいにつけます。実に白い粉がつき出すと甘くなり、果実酒などにできます。



ホコリタケ

2014年10月18日

楽山公園

棒や足などでつつくとカサのてっぺんから煙のような胞子を飛ばす、面白いきのこです。



アケビ

2014年10月15日

本学自然科学棟前

熟して外側が割れると、なかの白い部分を食べることができます。ヤマネなどにとってはごちそうです。



クサギ

2014年10月18日

法能

名前通り、葉や枝を折るとくさいにおいがします。実が青く熟すと、がくは赤くなって反り返ります。



シオデ

2014年10月18日

うら山

つる性の植物で、雄株と雌株があります。1cmほどの実は、熟すと緑から黒に色が変わります。



コムラサキ

2014年10月18日

法能

別名コシキブとも言います。実の直径は3、4mmほどと小さく、光沢のある紫色をしています。



ヘビが減っている？

ここ数年

うら山付近

ここ数年、本学のうら山付近で見られるヘビの数が減っているという話を聞きました。とくにヤマカガシはほとんど見られないようです。原因はまだわかりません。



テントウムシの集団越冬

2014年11月6日

本学自然科学棟

テントウムシは、枯れ葉や石の下、民家の塀の隙間などで何匹も集まって越冬します。自然科学棟内にある階段でも11月の初めには十数匹が壁の隅にかたまっていた。





ウスキツバメエダシャク

2014年11月5日

本学1号館前

幼虫はシャクトリムシの仲間です。真っ白な羽に薄い茶色の筋が伸びています。本州から九州に分布します。



ヤマガラ

2014年10月31日

うら山

羽の色合いがおしゃれで、山で会おうと嬉しい鳥です。この日は二羽一緒に見ることができました。



ジョウビタキ（オス）

2014年10月25日

十日市場

オスとメスとで羽の色がまったく違います。メスは全体的に茶色っぽいですが、オスはお腹のオレンジ色が鮮やかです。



ニホンリス

2014年11月22日

うら山

冬毛に生え変わっていて耳の先の毛が伸び、尾はふくらんでいて暖かそうです。頭から木をずるずると降りる様子は忍者のようでした。



ツグミ

2014年11月13日

本学ビオトープ

オスとメスが同じ色で見分けるのは難しい鳥です。顔のまわりの白いラインが特徴です。秋に群れて渡ってくる冬鳥です。



ホオジロ

2014年11月9日

楽山公園

開けた場所や草原を好み、暗い林のなかに入ることは少ない鳥です。名前のように目の下の部分は白いです。

暦で見つけた小さな変化

アサギマダラ

2014年9月24日

本学附属図書館前

今年、初めてアサギマダラがキャンパス内で見られました。この蝶の羽は、斑紋部分が半透明になっていて反対側が透けて見えます。ほとんど羽ばたかず、上昇気流にのってゆらゆらと舞う姿はとても神秘的です。

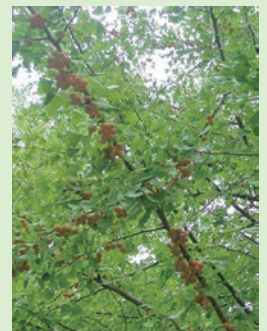


イチヨウの変化

2014年10月30日

本学自然科学棟前

本学自然科学棟前のイチヨウの木は昨年から実をつけ始めました。今年は去年と比べ、実の数は少ないようですが、実をつける木の数は増えました。来年はどう変化していくのか楽しみです。



変化を記録する意味

特集
まとめ

どんな生きものがいたのか、
どんな風景だったのか。

記録として残しておくことで、
当時のように振り返ることができます。

こうしたことが
変化の理由を解き明かす手がかりとなるでしょう。
また、未来の有りようを
考えるきっかけにもなります。

だからこそ、私たちはこれからも記録を
重ねていこうと思います。



(2014.12.07)

モグラ塚

12月7日まで、なにもなかった4号館前の芝生の広場。

今日こそは、と毎日モグラ塚が出るのを

たのしみに通っていた。

けれど、一週間経つても、ちつとも出てこない。

きっと今日もないだろうと思って見に行つた。

風が冷たいから外に出たくないと思

ってしまふような日だ。

何度見ても、変わり映えしなかった芝生のうえにぼっこり。

今まで地面のなかにあつたであろう湿つた土が

積もっていた。

待ちにまつたモグラ塚は寒さを象徴するように

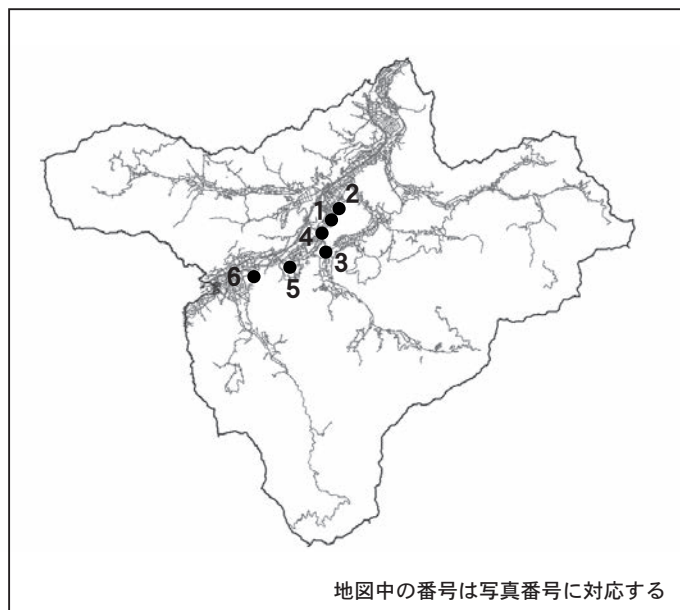
ところどころに霜をつけている。

緑のなかに土の色がある、いつもと違う景色になった。

都留の道の風景

現在、ミュージアム都留では「都留・古道の旅」と題した企画展を開催しています（平成 26 年 11 月 15 日～平成 27 年 1 月 12 日まで開催）。ふだん何気なく通る道も、時代の流れで周りの景色やルートは変化してきました。ここでは、古写真と現在の写真（平成 25 年、26 年撮影）から道の変化をたどります。

森屋雅幸・知念浩生（ミュージアム都留）
= 文・写真
古写真はミュージアム都留提供



地図中の番号は写真番号に対応する



①左は、昭和 16 年（1941）撮影。高尾町通りの宮井酒屋前でのラジオ体操の様子を撮影したもの。昭和 16 年の高尾町通りはまだ未舗装であるようだ。右は、平成 25 年（2013）12 月 5 日撮影。



②左は、昭和 28 年（1953）9 月撮影。中央一丁目交差点付近での八朔祭りの様子。行列が国道 139 号線を上っていく様子が写る。右は、平成 26 年（2014）10 月 25 日撮影。

都留文科大学地域交流研究センターのフィールド・ミュージアム部門では、地域で撮影された写真を保存・活用する目的で、これまで写真集『奥隆行写真コレクション』、『益子亮写真集』を刊行してきました。保存している写真は 5000 枚を超え、地域の小中学校などの授業でも活用されています。写真には、過去の記憶を今に伝えてくれる力があります。わたしたちは、これからも地域の写真と記憶を収集し、公開していきます。写真にまつわる情報などありましたら、ぜひ『フィールド・ノート』編集部までお知らせください。（編集部）



③左は、昭和 36 年（1961）撮影。葬儀で、鍛冶屋坂を行列している写真。現在よりも道幅が狭く車通りはない。昭和の初めころには、鍛冶屋坂の名前のとおり、鍛冶屋が軒を連ねていたと伝えられる。右は、平成 25 年（2013）12 月 5 日撮影。



④左は、昭和 7 年（1932）撮影。谷村町駅前から国道へ向かう道で撮影された龍石寺の稚児行列の様子。稚児行列とは、寺院・神社の祭礼・法会などのとき、天上界の人に扮した子どもが行列して歩くことをいう。道幅が今より狭く見物人で賑わっていた。右は、平成 25 年（2013）12 月 4 日撮影。



⑤左は、昭和 61 年（1986）10 月撮影。都留文科大学付近の動物病院裏手の道。現在、道は舗装され田もアパートに変わっている。都留文科大学前駅ができる前、谷村町駅から写真にあるような田のあぜ道を通った人もいた。右は、平成 25 年（2013）12 月 24 日撮影。



⑥左は、昭和 49 年（1974）4 月 9 日撮影。市制 20 周年ミス都留大会パレードが十日市場の国道 139 号線を吉田方面に進んでいる様子。現在、この国道の周辺には商業施設が立ち並ぶ。右は、平成 25 年（2013）12 月 24 日撮影。

◇劇作家の寺山修司は近代の道について次のようなことを述べています。「ぼくらがふつう路地という、両手を伸ばすとどちらかが塀に触れる幅だね。ところが日本の近代はそういうものをどんどん無用化し封鎖してしまい、道は人間中心から車中心になって、散歩という思想を切り捨ててしまった。だから、人間が通れる道についてもういっぺん観察して、そこから人間の捉え直しをしてもいいんじゃないかと思った。」（杉山正樹著『寺山修司・遊戯の人』、2006 年、河出書房、pp.22-23）。この言葉のように現代と過去の写真を比較すると、昔の写真は人々が道を自由に闊歩しているのに対し、現在の道は車ばかりが通り人気がないことに気が付きました。かつての道は人間との生活やそこから人間そのものと密接に関わっていたと思われ、今回の企画展では、そうした人々の息遣いが聞こえるような構成にしたいと考えました。（森屋）

『フィールド・ノート』のOB・OGの活躍をお伝えします。

山梨県南都留郡道志村

ドウシ・テ 「道志手帖 No.6」

道志村に移り住んで2度目の冬。この間季刊誌『道志手帖』を創刊し、6号まで発行を重ねてきました。今回はこの秋発行した、最新号の紹介をさせていただきます。

香西恵（道志村地域おこし協力隊）＝文・写真



今号の特集は「養蚕」です。蚕を飼育し、絹織物の原料となる繭を生産する養蚕は、農家の貴重な現金収入となる仕事でした。郡内は絹織物の産地として有名ですが、道志はそれを支える繭の産地のひとつでした。

かつて盛んにおこなわれていた養蚕は、今では姿を消してしまいました。県内ではわずかに10数軒が続けていますが、道志村では残っていません。しかし、村で昔の話を聞けば、必ずといっていいほど養蚕の話が出てきます。「おかいこさん」「おしら」「おこさま」「おきやーこ」。さまざまに呼び名で親しまれ、一時期は生活の大部分を占め、四季折々の行事や人生の節目と密接に関わっていた養蚕のこと。創刊当初から、どこかで特集したいと思っていましたが、今回それが実現しました。

私が養蚕というものを知ったのは山梨に来てからです。大学の裏山が、

昔は桑畑だったこと、道はたにある桑の木、ふだん通りすぎる家の造り。どれもが養蚕に関わっていて、今ある風景のなりたちだが、養蚕を知るにつれて見えてきました。

初めて養蚕について詳しくお話を聞いたのは、『フィールド・ノート』の「跡」（63号）という特集です。都留で「養蚕の先生」をされていたかたに取材しました。先生はさまざまな資料を用意して、養蚕について詳しく説明をしてくださり、誌面の都合上、全部を紹介できないのが残念でした。このときから、いつか養蚕について存分に引き上げてみたいと思っていました。（今回、それが叶いましたが、まだまだ聞き足りないこと・書き足りないことがいっぱいです）

ところで、取材をすすめるなかで、道志にも「お蚕の先生」と呼ばれる人がいることがわかりました。（最新号で詳しく紹介しています）

こんなふうに、都留で見聞きした

ことが、道志でもあてはまることを知ると、わくわくします。どこに、都留と道志のつながりがあるのか。どんなところが違うのか……。『フィールド・ノート』の読者のかたには、そんな視点からも『道志手帖』を楽しんでいただければうれしいです。

〈『道志手帖』に関するお問い合わせ〉
山梨県南都留郡道志村6181-5

道志村地域おこし協力隊

Eメール

kyoyokuta@doshi-okoshi.com

電話 0554-5212118

ホームページ

<http://www.doshi-okoshi.com>

* 『道志手帖』は都留市立図書館、都留文科大学附属図書館などでご覧になれます。そのほかの設置場所についてはホームページをご覧ください。

すぐそばにある暮らしを見つめるマガジン 「ヨコガオ face.01」

『フィールド・ノート』を卒業してから2年目の今年10月、東京都葛飾区で『ヨコガオ』という冊子を創刊しました。

崎田史浩（ヨコガオかつしか編集部）＝文・写真



創刊の経緯は、5月に近所で開かれていた読書会に参加したときのことです。この読書会では、「本をヒントにアクションを考える」というテーマで参加者が本を持ち寄っていました。身近な町ともっと関わりたいとの思いから、「葛飾で冊子を作ってみよう」と発表したところ、一緒にやりたいと声をかけてくれた人がいたのです。はじめは、なんとなく言ってみたくらいの思いでしたが、一緒にやりたいという声の温かさに励まされ、小さな冊子『ヨコガオ』が動き出しました。

『ヨコガオ』でやりたいことは冊子ありきではなく、同じ町に住む人同士が緩やかに繋がりたい、暮らしの楽しみを持ち寄りたいということです。町の規模は関係なく、人の暮らしがある場所それぞれに、物語があるのだらうと思ったのです。

『フィールド・ノート』は、冊子にするまでの過程に濃い時間があります。部員同士の意見交換や取材を

通しての人との交流、自分との対話。この経験を通じて、身近な人や自然から学べることの尊さが心に刻まれていたこともあり、この経験を葛飾の冊子でも得たいとの思いが強くなりました。

1号目の活動を通して

編集部員は、葛飾に縁のある20代から60代まで、町への関わりかたも肩書きもさまざまなメンバーが集いました。創刊号の特集テーマは、「葛飾の朝を旅する」です。2ヶ月かけて、各々が取材をしたり散策をしたりして原稿を仕上げていきました。

朝6時30分におこなわれているラジ体操へ参加しはじめての日常、河川敷でスケッチする人たちとの交流などが特集の記事に書かれています。特集以外にも、レトロをテーマにした町歩きや商店街のおでん種屋さんから職人技を学ぶなど、葛飾のことを通して書き手の思いが見えてくる記事が揃いました。

すぐそばにある暮らしを見つめることは一人では難しいかもしれません。けれど、同じ町をとっかかりに誰かと語り合えば、身近な町にも暮らしのあり方にも、関心が広がっていきます。私たち編集部は、「住む地域を通じて自分たちの暮らしを楽しむこと、のびのびすること」です。ごくごく身近な人との出会いと交流から育んだものが『ヨコガオ』として生み出される、そんなイメージで冊子を作りました。はじめは1冊作ってみようという気軽な気持ちでしたが、続けていきたいという思いがみんなのなかに生まれて、2号目の発行に向けて動いています。

『フィールド・ノート』での学びが新たな地域で実践に移せることが有り難くもあり幸せです。『ヨコガオ』がどんな冊子になっていくのか、葛飾の暮らしは今後も楽しみです。

* 11月25日付けの東京新聞で『ヨコガオ』についての記事が掲載されました。是非ご覧下さい。

* 『ヨコガオ』一冊 300円



中畠さんの畑から

「面白い人がいる」と、道志村に住んでいる
中畠拓哉さん^{なかしまたくや}（24）というかたを教えても
らった。道志村の地域おこし協力隊が発行し
ている『道志手帖』（24頁参照）を読み、わ
たしは中畠さんが大豆を植えるところから醬
油づくりをされていることを知る。確かに面
白そうかも。そう思い中畠さんにお話を聞き
たいことを伝えると、それと一緒に道志村の
案内をしていただけることになった。

中畠さんは本学を卒業し、地域おこし協力
隊として約2年前から道志村で暮らしてい
る。道志村の地域おこし協力隊になったのこ
はいろいろな理由や縁があった。道志村のこ
とを知ったのは、卒業論文の事例として足を
運んだから。そのとき道志村には醬油づくり
の文化があったことを知ったそう。大豆の魅
力に惹かれ、栽培や味噌づくりなどを大学時
代にしていた中畠さんにとって、醬油をつく
ることは村でやりたいことのひとつとなった。
もともと川で遊んだり、山に入ったりするこ
とが好きな中畠さんにとって、道志村はやり
たいことが全部叶う場所だったという。

中嶋さんの大豆畑

連れていってもらったのは、中嶋さんが大豆を育てているという畑だ。車道と畑をわけている柵越しに見る畑は、ずいぶん小さそうに見える。けれど柵のなかに足を踏み入れると、想像していたよりも大きな大豆畑が目の前に広がった。畑の真ん中あたりにある栗の木が絵になってかつこいい。少し黄色っぽくなつた大豆の葉は日の光を浴びてきらきら輝いて見えた。思わず「わあ」と声が漏れてしまう。畑全体が下り斜面になつているせいで車道からは全景が見えなかったのだ。



大豆のようすを確認する中嶋さん

「このへんは植えるのが1、2日遅かったからまだ青いんだよね」と中嶋さんが足元に植わっている大豆を一さやとつて見せてくれた。枝豆だ。除草剤や虫除けなどの農薬は使わなかったという。「全部植えるのに4日くらいかかったよ、ここ機械も使えないし。めっちゃ大変だった」と中嶋さん。そうか、ここは斜面だから機械が使えないのだ。この広さの畑に手作業で大豆を植えるのは、想像するだけで腰が痛くなつてきそう。大変だった、と言うけれど、そう話すようすはどこか誇らしそうだ。

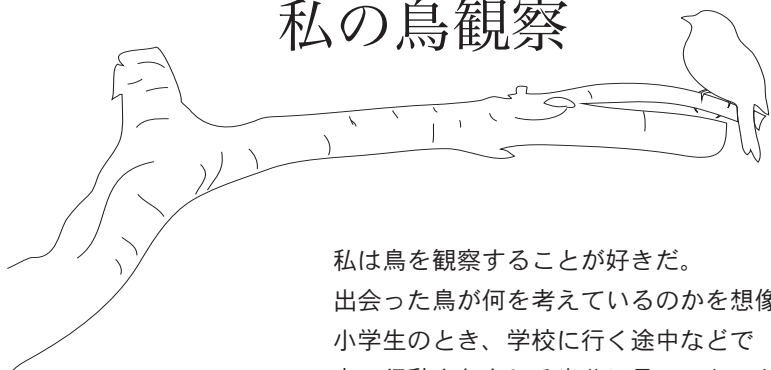
中嶋さんが誰かに向かってあいさつをする。視線の先を見ると、畑の奥からおばあさんが現れた。何株か持つていってくださいよ、と中嶋さんがそのおばあさんに話しかけると、じゃあありがとう、と枝豆の収穫が始まった。「今日はカメラマンつきなの」と、わたしに気づいたおばあさんが言う。すると中嶋さんが、わたしや『フィールド・ノート』の紹介をしてくれた。歳がいくつも離れた人とも楽しそうに話せるのがうらやましい。しばらく話したあと、笑いながらおばあさんは帰られた。

『道志手帖』の中嶋さんの活動報告には、中嶋さんに教えたり一緒に活動したりという形で、道志村のかたがよく登場する。道志村を案内していただいたときも、道中出会った地域のひとと楽しそうに話す中嶋さんの姿が印象的だった。やりたいことが地域の人たちに受け入れられている。あらためて考えると、わたしには難しそうなことに思えたけれど、じつさいに中嶋さんにお会いし、活動にかかわる場所を見て思ったことがある。

見せてもらった大豆畑は、道志村のなかのほんの一部だ。だけど、感動をくれたあの畑の風景は私にとつての道志村の景色になった。あの畑はどうなっているんだろう、もう大豆は収穫されたのだろうか。それもまた見てみたい。そんなふうに今は思う。道志村に住む人たちも似た気持ちなのかもしれない。教えたことやアドバイスしたことを、中嶋さんが形にして、そうやって道志村の一部がまたできあがっていくのが嬉しいのだ。道志村の外に住んでいるわたしもまた、中嶋さんの手によつて村に新しい景色ができるのを楽しみにしている。

舟田早帆(社会学科2年) 文・写真

私の鳥観察



私は鳥を観察することが好きだ。

出会った鳥が何を考えているのかを想像しながら見ている。

小学生のとき、学校に行く途中などで

鳥の行動をおもしろ半分に見ていたのがきっかけだった。

大学生になった今も、そんな見方を変わず続けている。

小俣溪和（社会学科1年）＝文・写真

お調子者と気の強いやつ

入学当初、鳥を見ようと思って行つたところが楽山公園だ。最初に姿を見せたのがヒヨドリ。「ヒーヨピーヨ」と大きく響く声で鳴きながら頭上を飛んでいったのが印象に残っている。正直なところ、彼らを見かけてもあまり嬉しくない。言いかたは悪いが「いつでも見られる。今見に来たのはお前たちじゃない」。そんな気持ちだ。でもヒヨドリたちのことは嫌いではない。勝手に思っていることだが、気の合う友だちのような感覚だ。

それからまたたび訪れると、公園のネズミの木でシジュウカラの鳴き声が聞こえた。鳴き声はしているのに姿が見えない。鳴き声をたよりに居場所を探す。見つけた。カメラを構える。それと同時にチョンチョンとステッブを踏むように枝の上を移動して逃げられる。からかわれているようでちよつとくやし。見ているだけではなく、どこまで警戒さしみのひとつだ。

遊歩道を少し登ったところではヤマガラを

見ることができた。ヤマガラは私がカメラを向けてもすぐには逃げずに「ニーニーニー」と怒ったように鳴いて、私を威嚇してから飛び去っていった。きつと「あつちに行け」などと言っているのだろう。私のシジュウカラのイメージはお調子者。ヤマガラは気の強いやつだ。

争奪戦

10月20日には本学自然科学棟の外階段から楽山公園方面を見渡して観察を試みた。今までの楽山公園での観察と違っていたのは、モズを初めて見られたことだ。

そのまま数十分見ていると、モズとヒヨドリの場所の奪い合いがはじまった。モズが木の頂上に留まって鳴いていると、ヒヨドリがそのモズに向かって鋭い鳴き声で鳴きながら飛んで来て場所を奪う。今度は木から飛んで逃げたモズが、一度空中で体勢を整えるように旋回してからヒヨドリに向かう。そして、しばらく同じような奪い合いを繰り返したあと、ヒヨドリが遠くへ飛んで行ってしまった。モズが勝ったようだ。

楽山公園で出会えた鳥たち



ヒヨドリ



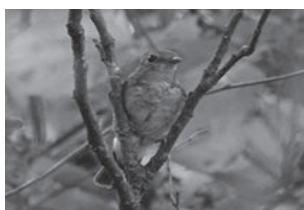
モズ



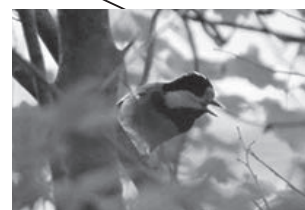
セキレイ



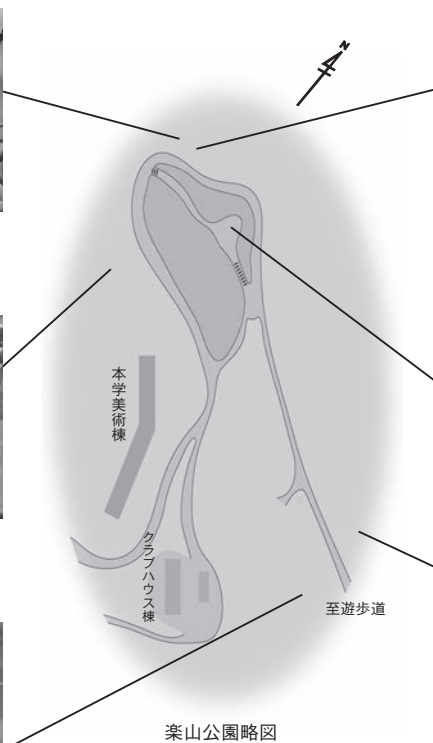
シジュウカラ



キビタキ



ヤマガラ



楽山公園略図

鳥に近づく

モズが鳴いていた木の頂上は、今まで観察していたときにヒヨドリがいることが多かった場所だ。ヒヨドリは自分の縄張りへ入って来たモズが気に食わなかったのだろう。

観察していると、鳥は私を警戒していることが多い。カメラのレンズ越しに鳥をはつきり見たとき、彼らの目がまっすぐにこちらを見ていることにドキッとする。きつとそのときはまだ、鳥に近づけていない。毛繕いをしていたり、仲間同士で何かをしていたりと自然な姿を見ていたい。それは鳥に近づけたときに見られるものだと思う。

鳥を見ることも、写真を撮ることも魅力的なことだ。けれど、私にはそれより楽しいことがある。それは鳥の気持ちを考えることだ。鳥と出会ったとき、彼らが何を思っているのか。勝手な想像だけど、彼らのようすを自分なりに感じ取って、気持ちも鳥に近づけたと思うのが嬉しい。自分の観察の仕方、鳥に対して思っていることを深く考えてみて初めて気がついた。鳥に近づきたい。それが今の私の鳥観察だ。

「ムジン」は

今……

さんくみめ 『八起飯店』のかたのお話



「ムジン」って知ってますか？

山梨県に続く文化のひとつです。

尽きることが無いと書いて、「無尽」。

この連載では、刻々と変化を遂げ続けている、

無尽の今を追います。

今回はちょっと視点を変えて、

無尽のおこなわれているお店のかたに

お話をうかがいました。

歩いているとじわじわと汗ばむほど暑く、

陽射しが強い10月30日の屋下がり。谷村第二

小学校を背にして、都留バイパス沿いにある『八起飯店』にお邪魔した。二階建ての三

角屋根、「八起」という名前から連想される

達磨^{だるま}たちがトレードマークだ。

出迎えてくださったのは志村邦昭^{よしかき}さん

(69)、良子^{よしこ}さん(62)ご夫婦と娘さん。ここ

は連載一回目でお話をうかがった「三吉会」

のかたがたが「無尽」をおこなう場所でもあ

る。入口正面が厨房で、左手側から店内奥に

かけてが座敷になっている。座敷に上がらせ

ていただき、早速お話をうかがった。

地域のお店だからこそ

お店に来るお客さんたちは、スポーツの打ち上げや地域の催し物の相談をする人などさまざま。そのような集まりのうちのひとつが「無尽」なのだそう。

娘さんは「自分たちも『無尽』の（繋がり）のひとつ。人との繋がりを大切に行っている」とおっしゃった。ただ食べるだけが目的ならばチェーン店でも問題はないだろう。しかし「無尽」の人たちが地域のお店を利用するのは、地域のお店だからこそ、があるからだ。

「無尽」は顔を見ながら一緒にものを共有することに大きな価値がある。みんなでひとつの大皿に乗ったものをつつき、飲み食いする食事はあくまで親交を重ねる方法のひとつだという。なにより大きな目的は集まることで、親睦を深めることなのだ。そんななか、いらつしやるお客さんごとの好みを把握して料理を出したり、時折季節のものをメニューに出したりする。そういった彩りを添え、工夫を凝らせるのはお客さんとの繋がりが強い地域のお店だからだ。

聞いたことのない風習

「ほかに言えるようなことはないよ」と言いつつ、「無尽」関連の話はないかとお三方とも記憶を手繰り寄せるように真剣に考えてくださった。「あとは家族会みたいな？」と娘さんがふとおっしゃる。邦昭さんも「ほうだ（そうだ）兄弟会」とピンときたらしく、ぼつと顔を上げた。

昔は兄弟が多かった。その兄弟の人たちがそれぞれ夫婦で連れ立ち、定期的に集まりコミュニケーションをとるのを兄弟会というそうだ。「無尽」同様形態はさまざま。家族会も集まる人が兄弟か家族かの違いだそう。

まったくもって聞いたことのない風習だ。しかし、聞いたことはないものの「無尽」の集まりに似たような雰囲気がある。邦昭さんは「あんたたちの所でもあると思うよ」とおっしゃっていたが、気づかなかっただけで私の周りにも存在するものなのだろうか。

私の様子を見て、「イエミ」って知らないでしょ、とさらにもうひとつ風習を教えてくださいました。「家を見せるってことだよ」と

娘さん。「そうそうそう」と邦昭さんが頷く。

「イエミ」とは、家を新築したときに地域の組の人を呼んで家を見せることだそうです。昔はそのままその家でお食事をして会話を楽しんだ。しかしそれが大変だとなったときに、家を見せた後お店へ場所を移すようになったそう。こちらも聞いたことのない風習だ。

さらに娘さんが付け足す。「あるところはあるけど、だんだん薄れてきてるよやっぱ」。その言葉で、いきなり視界が開けたような気がした。風習や集まりが変わってきているのは「無尽」だけではない。私は今まで「無尽」というただ一点だけを追ってきたけれど、目を向けるべきなのはそれだけなのだろうか。周りに息づく風習。これは、お話を聞く機会がなければ知る由もなかった。「無尽」はそんな周りにある移り変わりのひとつに過ぎない。それを強く実感した。あらゆる事柄に文化や風習の息吹を感じ、目を凝らすこと。もつと視野を広くもつことが、そつと息を潜める「無尽」やそのほかの風習の息遣いに気づく方法なのかもしれない。

別符沙都樹（国文学科3年） 文・写真

遊歩道を歩く理由

うら山を通っている都留自然遊歩道。シカやリスなどの生きものを見るために歩くことにした。自然に囲まれた道にはどんな出会いがあるのだろう。

南條新（初等教育学科1年）＝文・写真

9月27日の朝、何人かでうら山を歩いていると、右斜め後ろからガサガサと落ち葉が踏まれる音がした。音のするほうを見ると、10mくらい先に2、3頭のシカがいた。野生のシカを見たのはこのときが初めて。思っていたよりも華奢なシカは、草笛を吹いたような甲高い声で鳴く。こちらのようすをうかがっているのか、こつちを見つめる、そつぽをむく、の繰り返しだ。そして会ってから5分も経たないうちに、山奥に帰っていった。このときから、うら山の生きものに興味をもつようになった。ほかにもリスやイノシシなどがいると聞いていて、それらを見てみたいと思い始めた。

ちょうどこのころ、友人から都留自然遊歩道という道があることを教えてもらった。都留自然遊歩道は、下谷から鹿留にかけての



樹皮が剥がされたヒノキ。この木だけぼろぼろで目立っていた

山道で、全部で約9kmもある。そのうちの約2kmはうら山を通っている。うら山を通るなら生きものがいそうだと思い、この遊歩道を頻繁に歩くことにした。

感じた気配

歩き始めてから2週間ほどたった10月6日。楽山公園から元坂のほうに歩いていると、道のわきから笹がこすれあう音がした。少し気にして周りを見ると、皮を剥がされた木や、地面に掘ったような跡があった。何か生きものがいるのかな。これまで生きものに会えないでいたので、今日は会えるのかな、と期待で胸がドキドキする。すると、荒い息や低いなり声が聞こえ、ドコドコと走ってくる音まで聞こえてきた。いつきに血の気が引いて、私は慌ててその場から走っ

て逃げた。生きものに近づくことは楽しいことだけではないようだ。得体の知れないものが近づく恐さを初めて経験した。

さらに別の日には、違う場所で生きものの気配を感じた。楽山公園からうら山のほうに歩いていったときのことだ。5m先の木から、今までに見たことのない20cmくらいの灰色の何かが落ちてきた。それが隣の木に飛び移る。私がカメラを構えようとすると、灰色の生きものは木から地面へすると降りて、遠くのほうへ消えていつてしまった。一瞬だったが、小さくて灰色でふわふわしているように見えたので、もしかしてリスだったのではと思っている。ただ、はつきりと姿を見ることができなかったので、何だったのかわからないままだ。



何かの足跡。10月6日の恐い体験をした場所のあたりに、いくつかあったうちのひとつ

見つけた楽しみ

これまではずっと遊歩道の生きものに注目していたが、道に積もった落ち葉にも目を向けてみた。道幅の狭い崖沿いの道を歩いたとき、足下を見たのがきっかけだ。

11月に入って、遊歩道やうら山の地面に落ち葉がたくさん降り積もった。落ち葉の色はさまざまで、主張の強いオレンジ色や赤色のものや、薄い緑色のものもある。この色鮮やかな道を歩くうちに、落ち葉を強く踏みしめて歩くことが好きになっていった。足で落ち葉をすくうように蹴ると、自分の前に落ち葉がひらひらと落ちる。そうやって足で落ち葉をいじくりながら道を歩くと、落ち葉のふかふかした感覚を味わえるのだ。たくさん積もったところだと、一歩踏み出すごとにシャカシャカと落ち葉がこすれる音が聞こえる。その音を聞くと、つい足をとめられなくなってしまう。

ふだん見られない生きものを見たくて歩いた遊歩道だったけれど、肝心の生きものを見ることは思うようにいかない。木がたくさん生えていて鳥の音が頻繁に聞こえる。そんな



赤坂から楽山公園にかけての道。ここの落ち葉は黄色や茶色のものが多かった

自然のなかなのに、なかなか生きものに会えないなんてと落ち込む。遊歩道を歩けば簡単に生きものを見られると思っていたのは甘い考えだった。

そう悩んでいたけれど、落ち葉で遊んでから気が楽になった。それまでは、なんとなく生きものを見てやる、と考えていた。けれど、生きものを見ること以外に楽しみを見つければ、生きものにこだわらなくてもいい気がしてきた。ひとつのことだけにこだわらないで歩いたほうが、ほかの楽しみに気づくことができる、歩いていて楽しい。落ち葉のほかに、どんな楽しみがあるのだろうか。そう思うと、さらに遊歩道を歩きたくなってくる。

都留に残る織物産業

都留市商家資料館を訪れたとき、そこで甲斐絹を目にした。色鮮やかで、さまざまな模様が織り込まれた布や着物。いくつもの色をどのように使い分けて織っているのだろうか。昨年甲斐絹の展示をおこなったミュージアム都留の学芸員のかたなら詳しいことを知っているかもしれないと思い、後日お話をうかがってみた。

廣瀬はづ紀（社会学科3年） 文・写真

郡内で作られた織物に「織色郡内」という

種類の織物があった。その織物は海外から輸入された「海気」という織物に似ており、「郡内海気」と呼ばれるようになる。その後、全国にもっと「郡内海気」を広めたいという思いから、甲斐の国で作られた絹織物の意味を込めて「甲斐絹」という表記に変わった。

そもそも郡内地方では土地が農業が難しく、その代わりとして織物が盛んにおこなわれていた。郡内地方のなかでも都留市はいち早く甲斐絹が根付き、発展していく。しかし、戦後を境とした需要の減少や機械産業への移行により、徐々に織物を生産する人々は減っ

てしまった。そうしたこともあり、今では都

留市で甲斐絹を作っている人はおらず、織物を作っている人も市内に数人しか残っていないという。

かつて織物産業が盛んだったと聞いていたが、今ではそれほどまでに織物を作っている人が減ってしまったのかと驚いた。これだけ急激に数が減ってしまったのならば、織物産業が完全に都留市から姿を消してしまうのも時間の問題かもしれない。消えてしまう前に、都留市の織物について詳しく知りたい。そう思い、東桂で織物作りをしているという天野昭一さんを訪ねた。

技術を取り入れた人

天野さんは、洋傘生地を生産や販売をおこなう商店を経営している。私が甲斐絹についてお話を聞きたいと思っていることを伝えると、今は作っていないよ、と天野さん。天野商店ではふだん、甲斐絹の種類のひとつである解甲斐絹を作るときの手法（以下「ほぐし」）を取り入れて洋傘生地を作っている。甲斐絹自体は依頼があれば作ることがある程度だそうで、ふだんは作っていない。

洋傘生地を作る仕事は先代から受け継いだもので、天野さんが生地作りに「ほぐし」を取り入れ始めたのは10年ほど前のこと。「ほぐし」を取り入れたきっかけを尋ねると、「先代と同じ道を歩いててもしょうがないってことですよ」とおっしゃった。何か新しいものを取り入れたいと考えていたとき、東京に「ほぐし」の手法を取り入れている問屋があることを知る。その手法で傘を作ってみたところ、お客さんに喜ばれ、これは売れると感じたそう。そのため、取り入れるまでは甲斐絹に詳しくなかった訳でも、「ほぐし」を知っていた訳

でもない」と天野さんはおっしゃる。

熟練した技術が必要とする伝統産業は残していくにも手間がかかる。だからこそ、残そうという強い意志がないと伝統は消えていつてしまうという考えが当たり前のように私のなかにあつた。しかし、天野さんに「ほぐし」を作り続けている理由を尋ねると、結果として今もやっているだけだ、と答えてくださった。

た。どんなに強い想いがあるからといつても、じつさいにその伝統を仕事として続けていくためには生活できる最低限の収入を得なければならぬ。産業が消えてしまう理由のひとつはそこにある。「ほぐし」を使った傘生地



「ほぐし」を用いた生地を使って作った傘を広げてみせてくださる天野さん

を欲しいと思ってくれる人がいるから、天野さんは今でも作り続けている。だから、「ほぐし」を今もやっている理由に「結果として」という言葉を口にしたのだろう。

受け継がれる伝統

甲斐絹のおもな特徴は平織り(※1)であること、先染め(※2)であること、絹の無撚糸(※3)を使っていることだ。肌触りはいいが破けやすく、一般的に用いられる布より高価なため、しだいに市場に回らなくなった。しかし、技術は完全に消えた訳ではなく、天野さんのように新しく取り入れる人々によって受け継がれていく。

天野さんは「ほぐし」の今後について、どうなっていくかも分からない将来を気にするより誰かに継ぎたいと思ってもらえるように今をきちんとするしかない、とおっしゃる。今、たくさんの人に「ほぐし」を認めてもらえれば、後継者のことを考えなくても自然と残っていく。笑顔でそう語る天野さん。

家系による継承もあるが、新たな人によって受け継がれていくこともある。新たな継承

者は、天野さんのように必要とされることに気がつき取り入れる人や、残したいという強い思いから受け継ぐ人とさまざまだろう。それでも、どんな形であれ伝統は続いていく。代々受け継がれていく伝統のイメージが強かったが、それだけではないのだとあらためて感じた。

甲斐絹自体は1940年代に都留市からその姿を一度は消すが、甲斐絹の伝統技術を受け継いでいる織物は、今でもきちんと受け継がれている。都留市の織物産業の現状は形を変えて今も残っているのだ。数が減ったからといって必ずしもなくなってしまう訳ではない。時代が変わっても、伝統が残っているということは作り手とそれを認めてくれる人がいるということの意味している。今後、都留の織物産業がどうなっていくかは分からないが、周りから認められる限りこれからも続いていくのだと思った。

(※1) たて糸とよこ糸が一本ずつ交互になっている織り方。

(※2) 先に色をつけた糸で織ること。

(※3) 撚^よっていない一本の糸。ふつうの糸と比べると細く、非常に切れやすい。

10月1日 大きさを実感



巣箱②にムササビがいました。このところ巣箱のどちらかにはムササビがいます。涼しくなってきたからでしょうか？

ふだん丸くなっていることが多く、ムササビの大きさを覚えることはあまりありません。大人のムササビは尾を含め70cmくらいになります。長い尻尾がよく見えます。

ムササビ 観察日記

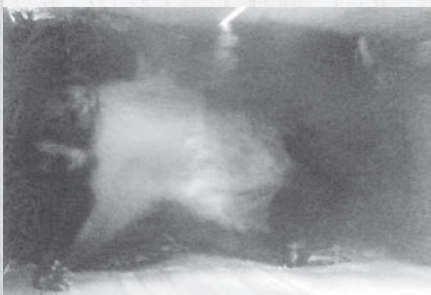
昨年、ムササビライブカメラを2つの巣箱に取り付けました。本学ホームページ (<http://www.tsuru.ac.jp>) では『ムササビ観察日記』のブログを更新しており、ムササビのようすをご覧ください。みなさんも一緒にムササビのようすを見守っていきましょう。

本学フィールド・ミュージアム=文・写真

10月2日 寝相に個性があるようです



巣箱①



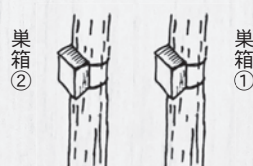
巣箱②

ホームページ上の画面では、巣箱①のライブカメラは左端しか映っていないためムササビは一見いないように見えます。しかし拡大すると巣箱全体が映し出されます。すると右端に丸くなって寝ている姿を発見しました。久しぶりに両方の巣箱にムササビが入りました。

巣箱①：右端に丸まって、ほとんど動くことなく寝ていました。

巣箱②：巣箱①のムササビとは対照的に両手両足を広げ、大の字で寝ています。この写真を見たら、ムササビを見るのが初めてのかたも彼らに対して愛着が湧くこと間違いなしだと思います。

※美術棟を背に見たときの配置です



山小屋、楽山公園側

大学、グラウンド側

10月22日 朝の楽しみ



ムササビを見ていると朝にごそごそと動いていることが多い気がします。朝9時ごろライブカメラを見てみると、ムササビが巣箱のなかでしきりに動いていました。ほんのわずかな時間ですが巣箱の外に顔を出したり、カメラに向かってとび跳ねたりと久しぶりに元気なようすを確認することができました。

10月3日 最近毎日入ってます



朝晩と冷え込んでくるようになりました。しかしまだ日中は少し汗ばむ陽気が続いています。猛暑が過ぎ去ってから、ムササビが巣箱にいる確率はとても高くなったように思います。今週一週間は毎日のように巣箱②にムササビがいました。本学美術棟横の巣箱はムササビのお気に入りの寝床となったようです。

ムササビコラム

ムササビとモモンガの違い



【後ろ足から尾にかけての皮膜】
ムササビ：あり
モモンガ：なし

【大きさ（尾を含む）】
ムササビ：70cmほど
空飛ぶ座布団と比喻される
モモンガ：25cmほど
空飛ぶハンカチと比喻される

ムササビはモモンガに比べ大きい体で滑空をしなければいけないため、前足から後ろ足のあいだだけではなく、後ろ足から尾にかけても皮膜が発達しています。また、ムササビは一度の出産で1～2頭子どもを産むのに対して、モモンガは5頭ほどと、ムササビより多く産みます。

ムササビ
頭の両側に白い模様が入っています



モモンガ
尻尾にラインが入っています。大きな目が魅力的です

ネズミに会いに 夜の森へ

長尾泉（初等教育学科 1 年）＝文・写真

うぐいすホールの脇の道からうら山を10分ほど登っていったところに大桑小屋、モグラ小屋という二つの小屋がある。そこが、彼らとの出会いの場だ。

ネズミに会いたい

10月4日から餌付けを始めた。大桑小屋のなかには小さな穴で外に繋がっているケースが二つ取り付けられている。そのなかにクルミを二、三個とヒマワリの種を散らばせておく。7日、ふたたび餌付けに向かうと、ケースのなかは明らかに様子が変わっていた。どちらのケースにもクルミは一つしか残っておらず、ヒマワリの種もほぼなくなっていた。確かに来ているんだ。なんだかネズミが自分のすぐ近くにいる気がした。

その翌日、私は餌付けのために初めて夜の森に入った。もしかするとネズミに会えるかもしれない。そう思っただけで、その暗さに足がすくんでしまった。懐中電灯の細い光が足下を照らすのみで、前も後ろもすぐ横も、自分の周りすべてが真っ暗だった。こんなにも

森に入ることの恐いと思ったのは初めてだ。やっとの思いで小屋にたどり着く。ケースをのぞいてみて驚いた。奥のほうのケースにネズミのものとされる尿が残っていた。つんと鼻を突くにおいがした。来ている。さつきまでこのケースのなかにいたのだ。恐さが一気に吹き飛んだ。でもその日はもうエサを食べ終わったあとだったのか、ネズミは一度も出て来てはくれなかった。やはりそう簡単に会うことはできない。本当に実物を見ることはできるのだろうか。少しがっかりして山を下りた。

待ちにまつた対面

10月12日、ついに、私のなかでこれから先ずっと心に残るだろう日が来た。この日は前回よりも少し早めの時間から山に入ることにした。

大桑小屋についてすぐ、20時50分ごろ、一緒に登っていたメンバーが小屋のなかから赤ライトで外を照らしていると、突然、小さく「来てる!」と声をあげた。私が初めに見たものは、葉の隙間から見える焦げ茶色の小さな背中だった。赤ライトの光を浴びて、つや

つやと光っている。ネズミだ。思わず、あつと声が出た。体温がほわーと上がった気がした。そのネズミは、一回姿を見せるとその後数分間隔で何度も何度も私たちの前に姿を出してくれた。初めのうちは警戒しているのか、穴から少し顔をのぞかせてこちらの様子うかがっていたが、少しするとカメラのシャッター音も気にせずケースのなかのほうまで入ってエサを食べ始める。結構大胆な行動をするものだ。

今回会えたのは、アカネズミという種類の野ネズミだった。一番印象的だったのは、顔からこぼれ落ちそうなほど大きくて黒い目だ。くりくりしたまん丸の目だった。茶色の毛並みに、思わず手を伸ばして触れなくなってしまう。透けそうなほど薄くて大きな耳。体と同じくらい長いしっぽ。もう冬毛なのか、少しまるつとしておなか側の白い毛はふわふわだ。ヒマワリの種に小さな前足を添えて、かりかりと食べている。なんて、なんてかわいいんだろう。つい見とれてしまった。見ていてまったく飽きない。

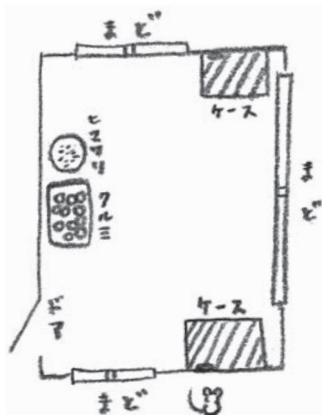
結局その日は、1時間半くらいのあいだに何度も出てきてエサを食べては、またどこか

に走っていくというのをくり返していた。夢中になって見ていたからか、山を下り始めてからやつと本当に会えたんだという驚きと嬉しさが追いついてきた。

小さな背中を追いかけよう

ずっと会いたかった野ネズミ。以前は、ただ会いたい、目の前で見てみたいというだけだった。けれど出会ってから、次から次に謎が湧いてくる。こんなに触れられそうなのに近くにいっても恐くないのか、人が触ったエサでも気にならないのか、電気の明かりやシャッター音にもすぐに慣れてしまうのか……。出会えたことで前とは違った視点から興味をもてるようになっていた。

彼らのもっといろいろな姿を見てみたい。自然のなかで走り回ったり、子育てしたりしているところをじっさいにこの目で観察したい。まだまだ知らないことは山ほどある。こんなに魅力あふれる生きものに出会ったのは初めてだ。この日、見ることでできた嬉しさを忘れたくはない。これから私はどれだけ彼らに近づけるだろう。今からわくわくしている。



大桑小屋のなかの様子



「こんばんは」。ケースの穴から顔をのぞかせ、エサを食べる



ケースの下にはヒマワリの種の殻が散らばっていた



立ち上がって辺りの様子をうかがう

あの人の 尊敬する人

若林英行さん

私の尊敬している人にもまた、尊敬している人がいた。私が出会ったあの人がすてきだと思う人はどんな人だろう。

第3回でお話をうかがったのは、菊地富美男さんにご紹介いただいた「ヒーコさん」。カフェを営むヒーコさんとはどんな人だろう。

伊藤瑠依（社会学科2年） 文・写真

街灯ひとつない真っ暗な道。先に

進むのを一瞬ためらうほどの坂を降りれば、少しずつ木漏れ日のような明かりが見えてくる。ここは、都留市つるにある中央自動車道から一本外れた路地。少し奥まったところにあるお店の前の小道には、『カフェナチュラルリズム』の看板がある。ぼんやりと看板を灯す明かりは、その場を闇に浮かび上がらせているようだ。キャンドルが道標のように点々と置かれた道を行けば、扉の前にたどり着く。そして引き戸を開けると、「こんばんは」の声が店内に響き渡り、やっと着いた、と安心感が込み上げるのだ。

声の主は、ヒーコさんこと若林

英行さん（47）と奥さんの千秋さ

ん。店内へ入って右側にはL字型の木製のカウンター席があり、その奥のキッチンにいつもおふたりが立っている。

カウンターの前にはいつ来ても誰かがいた。仕事帰りでスーツを着た人や小学生とのお母さん、ときには大学の友人やまちの商店街の人とぼったり会うこともあった。さまざまなお客さんと会えるのは、ヒーコさんが以前働いていたカフェの形を参考にして、営業時間を20時から25時と遅い時間帯にしたこともひとつの理由だろう。お客さんのひとりが言う。

カウンターの席にひとりで座る人の多

くは、ヒーコさんと話したくて来る人ではないかと。その人が言うように、いつでもカウンター席にはヒーコさんとの会話をしげにしている人がいた。

全然あれになんなかった

お店の左側にあるのは、じんわりと暖かい薪ストーブと体を包み込むようなソファ。窓際を照らす色とりどりの明かりは、ステンドグラスでつくられたキャンドルランタンだ。ソファにもたれ、ランタンのゆらめく火を見つめていると、ついうとうとしてしまう。気張らずに安らぐこ

とができるカフェナチュラルリズムは、じつはヒーコさんの手によって改装されたお店だ。

今から13年前、当時大工の仕事をしていたヒーコさんは、前々からお店を開きたいと思っていたが、納得のいく場所を見つけれずにいた。しかし、冬場の仕事がない時期に暇をもて余し、散歩をしていて見つけたのがこの場所。当時は建物も小屋のようで、草も背丈ほどに生い茂っていたという。けれど、目の前には広葉樹と針葉樹が交じり合って広がり、見下ろせば川が流れる風景に、ヒーコさんは魅了された。それから4年もの歳月をかけて建物を改装し、2005年、カフェナチュラルリズムは開店した。

ヒーコさんが顔をほころばせて無邪気に言う。「でもね、全然あれになんなかったよ。ここに来てやろうと思うんだけど、本読んじやったり、たまにはビールとか飲んじやったり

り」。作業の手もつい止めてしまうほど落ち着く場所であり、それゆえにお店もなかなか形にならなかったのだ。完成までにかかった4年は、どれだけここがヒーコさんにとって心地よい場所かを示しているようだ。そして手を止めてしまったことを正直に言ってしまうヒーコさんの飾らない人柄に、人々がヒーコさんと話したくなる理由を見た気がした。

来るたびに変わるお店

あるとき、ナチュラルリズムで私は違和感を覚えた。何かが違う。

不思議に思い目を凝らしてお店を見渡すと、この前来たときにはあった棚がなくなっていることに気がつく。代わりに以前まではなかった、点描で描かれた鮮やかな色のイラストが飾られていた。それから何度か足を運んだが、そのたびに何かがなくなったり、新しく置かれていたりした。

ヒーコさんはお店について、気分やマイブームのようなものが反映されるとおっしゃる。それを聞いて、お店が来るたびに変わっているのにも納得した。自分の理想のお店をつ

くり続けようとしたら、ヒーコさんの心が変化すると同時にお店も変化するのとは当たり前であり、むしろ変わらないことのほうが不自然のようにさえ思えた。お店を夜に開くことが、以前働いていたカフェでの経験が元となっていたように、ヒーコさんの過去は、確かに今のお店へとつながっていた。今までしてきた経験

のどれかが欠けても、まったく違ったことをしていても、今のナチュラルリズムにはなっていない。そして、これからする経験によってもお店は変わり続け、ヒーコさんの歴史がお

店に積み重なっていくのだろう。カフェナチュラルリズムは私たちにヒーコさんの過去や今を教えてくれているようだった。

何かよさを感じるからお客さんは訪れる。それはお店の雰囲気だったり、お茶の味だったり人それぞれだろう。けれど、お店にあるすべてのものはヒーコさんのこれまでの経験や今の気持ちがあって生まれたものだ。ナチュラルリズムをいいと思うこと。これはヒーコさんのこれまでもや今も変わり続ける歩みに、よさを感じていることでもあったのだ。



つるのあしもと

都留の町を歩いていると、よく溶岩を見かける。
それは大抵、目線より少し下のほう。足元に。
どうして都留には溶岩がたくさんあるのだろう。
都留と溶岩の関係を知りたくなった。

金原由佳（社会学科2年）＝文・写真

都留に来るまで、私にとって溶岩は「貴重な石」だった。それというのも、祖父の家には曾祖父が[※]富士講で富士山に登ったときに持ち帰ったという溶岩が置かれていて、私はいつも「貴重なものだから触らないように」と言い含められていたからだ。

私が都留で初めて見た溶岩は、中央自動車道の中央分離帯に置かれているものだった。私は道の真ん中の生垣に無造作に置かれた溶岩の姿に、思わずもったいないと思った。けれど都留の町に来てみれば、いたるところに溶岩があり、利用されていたのだ。衝撃的なその光景に、なぜ都留ではこんなに溶岩が使われているのかという疑問がわいた。

都留と溶岩

都留市の石造物に関する文献をあたってみると、都留市で石造物が盛んに建造されるようになった要因には、勝山城と谷村城の築城があった。城の石垣や水路をつくるために、都留にたくさん石工が集まった。都留は富士山の噴火活動で流れてきた溶岩が地盤となっているため、溶岩は比較的簡単に手に入る。だから都留では溶岩を使用した石造物が

多くつくられるようになったのだろう。

都留で溶岩を見かけるのは神社周辺や水路の近くが多い。とくに神社ではいろいろなところに溶岩が使われている。でもそれは、石垣であつたり石畳であつたりと、けつして目立つ存在ではなく、石仏のように彫り物がされるようなものでもない。むしろ石仏を支える土台にされているものをよく見かける。そのほかでは、石塔の根元の補強や蔵の土台などに利用されていた。ぽつぽつと穴のあいた溶岩の姿は一見するとスポンジのようだけれど、丈夫なのだろうか。調べてみると、富士山の溶岩流によつてできた溶岩は玄武岩に分類されるもので、硬く丈夫な性質をもっていた。そのため、大きな建物や石垣などに使われたのだ。

石材を扱うお店でいまでも溶岩は一般的なのだろうか、10月25日に都留市駅近くにある地場石材店をたずねた。対応してくださったのは地場石材店の奥さん。亡くなった旦那さんより詳しくはないけれどそれでもいいなら、と話を聞かせてくださった。

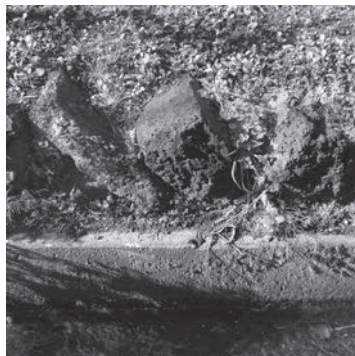
溶岩の加工をされていたかお聞きすると、1970年代以前は中央自動車道のインター



西涼寺の石垣。谷村城の石垣を谷村の大火後に移設したものとされる



谷村陣屋跡地の石垣



用水路と畑のあいだに置かれた溶岩



上部が溶岩でできている長安寺の常夜灯

チェンジ付近にある置き場から溶岩を採ってきて石垣などにしていたそうだ。しかし、それ以降はされていないということを教えてくださった。最近では簡単に加工ができる丈夫な石材が増えたこともあり、溶岩を利用することはほとんどなくなったのだろう。

あたりまえ

都留には溶岩でできた石造物がたくさんある、ということは地域のかたにとってそれほど驚くことではないという。都留では溶岩があることはあたりまえなのだ。

じつを言うと、私も以前ほど溶岩を珍しいとは思わなくなっている。都留で暮らすうちに、溶岩を見慣れてしまったからかもしれない。溶岩だけでなく、日常のなかにあるものではどうだろう。最初は珍しいと見ていたものが、いまでは生活の一部として馴染んでいる、ということはないだろうか。

そのものがもつ魅力や価値を、あたりまえにあるものとして見逃さず、いつでも新鮮な気持ちで捉えられるように。自分のもつあたりまえをつねに疑って見る目をもち続けていかなければ、とあらためて思った。

※富士山を霊山として登拝する信仰組織



FIELD・NOTE NEWS 2014. 8-11

都留^{のこ}に遺る石碑 (8月23日)

ミュージアム都留の職員のかたがたと、都留市内に古くから遺る「月待ち講」の石碑の調査をしました。「月待ち講」とは、二十三夜や二十六夜など、信仰する特定の月齢の夜に人々が集まり、お祈りや食事をしながら月の出を待つという風習のことです。かつて都留市内では月待ち講が盛んにおこなわれていたようで、講をおこなったしるしに遺した石碑が各地にあります。今回は法能地区や四日市場地区を巡り、5つの石碑を確認しました。(金原由佳)



二十三夜講の月待ち塔。交差した道の脇に置かれていた



刈取りは機械でおこない、刈り取った稲を「稲木^{いなぎ}」と呼ばれる支柱に掛ける「はざかけ」をおこなった

お米の収穫 (9月23日)

6月にお田植えをさせていただいた羽野^{はのさち}幸さんの田んぼの稲刈りを『フィールド・ノート』編集部員でお手伝いさせていただきました。お田植や稲刈りをお手伝いするだけでも大変だったので、育てるために手入れをしていくことはさらに大変なことだと思いました。ふだん何気なく食べているお米ですが、じっさいに作る過程をお手伝いすることでそのありがたみを実感します。貴重な体験をさせていただきました。(小俣溪和)

あかりのない博物館 (10月12日)

ミュージアム都留でおこなわれた「ライトダウンやまなしバレー」のイベントに参加しました。近年は夜でもまちなかには光があふれ、星空を観察することができなくなっています。そこで電気を消して星空を観察しようと企画されたのがこのイベントです。当日は廃油を利用したキャンドルや、月の動くしくみがわかるコマを作りました。親子で参加されるかたが多く、元気な子どもたちに癒されながら作業をおこないました。あいにくの天候で星空は見られませんが、手作りのキャンドルに火が灯されたようすは電気がない夜もいいものだなと思わせてくれました。(伊藤瑠依)



廃油を湯せんしているようす

『フィールド・ノート』編集部の8月から11月の活動についてお伝えします。
『フィールド・ノート』編集部=文・写真

「大切なもの」を詩にのせて (10月17日～19日)

都留市ふるさと会館で都留詩友会が主催する第26回詩画展が開催されました。今年の詩の共通テーマは「大切なもの」で、会員それぞれが大切にしているものと、それについて書かれた詩が会場の中央に展示されました。都留詩友会は今年で40周年を迎えます。10月18日には都留詩友会40周年記念セレモニーが催され、現詩友会員や元詩友会員による詩の朗読が披露されました。3日間で約250人の来場者があり、詩画展は今年もおおいに盛り上がりました。(舟田早帆)



それぞれ趣向を凝らした作品が展示されていた



「富士道アメヤ坂」と書かれたこの石碑。かつては道しるべの役割を果たしていた

昔に思いを馳せながら歩く (10月18日)

ミュージアム都留で11月15日から始まる企画展「都留・古道の旅—信仰の道・交易の道—」の準備としておこなわれた現地調査に参加しました。これは富士道とトンネルの調査が目的で、ミュージアム都留から禾生のほうにかけて歩きました。広い道路が新設され、今ではあまり利用されていない道も多くあります。しかし、かつて利用していたときの証がきちんと石碑に刻まれ現在も残っています。調査のようすは企画展のなかでも紹介されています。(廣瀬はづ紀)

プチニュース

①クリ拾い (10月4日)
うぐいすホール周辺でクリ拾いをしました。

②オープンキャンパス (10月13日～24日)
編集部員がキャンパスツアーのガイドを担当し、学内を案内させていただきました。

③クルミ拾い (10月18日、11月4日)
1回目、2回目とも熊太郎神社へクルミを拾いに行きました。

④手づくりみそ完成
2年半前に大豆から仕込んでおいたみそを編集部員で食べました。

『フィールド・ノート』がデジタルパンフレットに

本学ホームページ、「地域交流研究センター」のページから、『フィールド・ノート』のデジタルパンフレットが閲覧できるようになりました。従来のものよりもじっさいの冊子に近いカタチで読むことができます。ぜひご覧ください。

FIELD NOTE

no. 83 Dec.

発行人

北垣憲仁 (8-9,22-23)

統括編集者

西教生 (10-11)

編集長

別符沙都樹 (24-25,30-31)

副編集長

伊藤瑠依 (12-13,40-41,46-47)

舟田早帆 (26-27)

編集

廣瀬はづ紀 (34-35)

加藤萌香 (4-7,20-21,36-37)

金原由佳 (16-17,42-43)

今村遥香 (14-15,44-45)

小俣溪和 (2-3,28-29)

高橋未瑠来 (47)

長尾泉 (18-19,38-39)

南條新 (1,32-33,48)

ロゴデザイン

工藤真純

[] は編集担当ページ

FIELDNOTE (フィールド・ノート) 83 号

発行日: 2014 年 12 月 25 日

発行部数: 500 部

発行・編集:

〒402-8555

山梨県都留市田原 3-8-1

都留文科大学

コミュニケーションホール地下 1 階

地域交流研究センター

フィールド・ミュージアム部門

『フィールド・ノート』編集部

E-mail: field-1@tsuru.ac.jp

バックナンバーは都留文科大学コミュニケーションホール地下 1 階の地域交流研究センターにありますので気軽にいらしてください。

編集後記

秋の夜長におすすめの一冊

か つ字を読むのが苦手なので、小説は片手で数えられるくらいしか読んだことがありません。けれど最近、眠れない日が続いたので、先輩から借りていた文庫本を読み始めました。今読んでいるのは『夜は短し歩けよ乙女』。変わった言いまわしが楽しくて、本を読むのが苦手な私にも読みやすい一冊です。ヒロインの「彼女」が不思議な出会いを重ねながら、少し怪しい夜の京都を歩いて行くのを見守るような気持ちで読んでいます。まだ一章しか読めていませんが、これから物語がどうなるのかを楽しみにしています。

(舟田早帆)

え んえんと続くように感じる秋の夜。なんだか寝付けないとき、私は本を手にとって物語の世界に入っていきます。なぜだか、ふと読みたくなるのが『トム・ソーヤの冒険』です。第二部で主人公のトムが仲間たちと家出をして、島で 3 人だけで生活するようすがいきいきとしていて、自分も一緒に生活しているかのような気持ちになります。キャンプをしているときのようなドキドキ感。読み終わってみると、冒険から帰ってきたような感覚になってぐっすりと寝られるのです。

(小俣溪和)

で へへ。本当にそう聞こえてきそうなほどのニヤケ顔。お茶をこぼして焦っているように、ぐっすり眠り込んでいる子ども。『ダカフェ日記』は何気ない家族の日々を切り取った写真集だ。一枚ごとに写真を撮っている父親のコメントがそえられている。そのコメントがまた写真にぴったりあっているのだ。眺めていると、ついぐっすりと笑えて、ほっと心が温かくなる。ごくふつうの家族の一日が不思議と特別な日に思えてくる。ちょっと元気が欲しいとき、ふと手がのびる一冊だ。

(長尾泉)

祝
晋
山

次回予告

2015年3月 発行予定

変化

—文化編—
(仮)

大正五年十一月二十八日、

現在谷村駅前にある龍石寺に

新たな住職が就任した。

人々はそれを祝い、人力車の列を連ねる。

いつしかこの龍石寺は

寺社に不動尊の石碑があることから

お不動さんと呼ばれるようになった。

呼び名は変わってしまったけれど

今なお地域の人々に親しまれている。



中屋敷の自然の変化

中屋敷フィールドにて



里山の春。さまざまな生きもので賑わっていた中屋敷 (2008.04.20)



突然、工事が始まった。ここには大規模なソーラーパネルが設置されるという (2014.10.23)